2023 年度の３つの教育実践報告

１．学長裁量費報告（教学改革事業成果報告）
２．親子のためのオープンキャンパス報告
３．小村寿太郎記念館を活用した歴史授業から関税を考える授業実践報告「社会科教育法」

酒井　喜八郎

はじめに

2023 年度は、１．ICT とデジタル教科書実践研究、２．親子のためのオープンキャンパス報告、３．大学教科書による社会科教育法の授業実践報告、の３つを報告する。

３つの実践報告

実践１．学長裁量費報告(教学改革事業成果報告：酒井喜八郎、福富隆志)

事業名　ICT を活用した大学の授業デザインと学修の可視化の研究 (2) ～デジタル教科書と紙教科書の併用とプログラミング学習に注目して～

A study of Lesson design by using ICT and visualizing of student learning
-Focus on combined use between paper textbook and digital textbook, and programming study-

１）成果の要約

2023 年度の本改革では、南九大の子ども教育学科の学生を対象に、「デジタル教科書とプログラミング教育の活用法」について、先駆的に実践研究をして３年目となった。(学長裁量費としては２年目)。

まず、3 年目になる令和５年度は、「教育と社会」の受講生３年生 65 名に対して、プログラミングの授業と SCRATCH の授業を 15 回のうち５回連続して実施した。また、酒井ゼミ２年生５名に対して、新井（2020）　のデジタル教科書と紙教科書のテキストを輪読し、その後、ゼミ生たちは、デジタル教科書と紙教科書の比較研究をした成果を発表した。この発表成果は、情報学研究所の数学者新井紀子氏も、自分の本の感想が読みたいと言われ、送付した。※新井紀子 (2020)『ほんとうにいいの？デジタル教科書』岩波ブックレット，　P.70.　岩波書店

また、酒井・福富は、8 月上旬に、インテックス大阪で開催された ICT 教育展に参加し、デジタル教科書やプログラミング学習の最先端に触れることができ、多くの知識を吸収した。特に、東京学芸大学の高橋純教授により、i-pad やデジタル教科書を活用した教室の授業形態についての提案があり、新たな視点であり、授業でも取り入れたところ、受講生たちからも好評であった。

２）実践研究報告

(1) 関西 ICT 教育展で学んだこと

３年目は、酒井（社会科教育・教育方法学）、福富（教育心理学・統計学）の２人の子ども教育学科の教員で共同研究を実施した。夏休みまでは、各自 ICT 教育に関する文献研究を行った。そして、8 月３日、4 日にインテックス大阪で開催された関西 ICT 教育展に行き、デジタル教科書の講演や、i-pad に関する講演をいくつか聞き、新しい最先端の知見を深めることができた。特に、勉強になったのは、8 月３日に開催された放送大学の中川一史教授の「デジタル教科書の現状と課題」の講義である。台湾などがデジタル教科書の先進国であることや、どのような教育技術が進んでいるのか具体的なデータから理解することができた。また、東京学芸大学の高橋純教授により、i-pad やデジタル教科書を活用した教室の授業形態についての提案があり、新たな視点を授業でも取り入れたところ、受講生からも好評であった。また、社会科は国語等他教科と比べて ICT を活用した実践が少ないことがわかった。今後、大学の講義やＦＤ研修などで還元していきたい。

(2) 選択社会（後期）でのプログラミング学習の導入と、親子教室での学生によるレクチャー

プログラミング学習も、選択「社会」の講義で積極的に導入していった。

SCRATCH にチャレンジした学生の感想は次のとおり。

> 学んだことは、プログラミング教育の大切さである。実際にスクラッチに登録して、家に帰って、酒井先生からもらった課題に取り組んだが、ドッチボールゲームを完成することができたが、起動してみるとき、思ったようにいかなかったのがとても悔しく思っている。

この選択「社会」の講義を通して、受講生たちも、プログラミング教育の重要性を、実際にスクラッチの教員が出した課題に取り組むことで、気づいたと考える。

(3) 成果の詳細

８月３日（木）

ICT 関西教育展に酒井、福富２人で参加した。（インテックス大阪）。

午前中、「デジタル教科書の現状と展望」というテーマの話を聴いたが、大変興味深い内容であった。紙とデジタル教科書のハイブリッドの活用については、紙とデジタルの併用なので２項対立ではないということであった。また、ICT 教育において外国語は特に重視されており、全ての中学校で使用することになるとのことである。ICT 教育の英語での活用が重要であることがわかった。文科省 HP でも、個別最適な学び、と協働的な学びに関する記事が多くあること、デジタル教科書を活用した算数の実践などが掲載されていることがわかった。

デジタル一斉授業については、①課題に集中する②自分の考えをつくりあげる③考えを共有する④さらに、試したり確かめたりする、という一連の流れが数学的見方・考え方のねらいに迫ることができるということであった。このようにデジタル教科書のメリットとして、紙と異なり、思考の過程を持ち寄ることができることがわかった。また、国語では、「マイ黒板」の活用が有効であること、外国語では、書き込み、コミュニケーションの活性法、が有効であることがわかった。マイ黒板は、外国語でも ICT 活用をしたいとの報告があった。逆に、社会科の授業での活用法が充分に研究されていないことがわかった。「学びのデジタルポートフォリオへということ」と、「本来の教科書の役割とは何なのか？」という２点について改めて再考することが重要であることが示唆された。

また、司会者の放送大学の中川一史氏より、次の４点が、授業レベルでの論点として具体的に整理されたことは意義がある。

① 個別化と協働の「行き来」のポイントは？
② 紙教科書とノートの使い分けは？
③ 生徒に委ねるギアチェンジのきっかけは？
④ 教師用デジタル教科書と生徒用教科書の違いは？

以上、４点が重要であることがわかった。

午後からは、「デジタルシティズンシップと情報モラル」というテーマの話を聴いた。

近年、海外や日本でも注目されており、（NCSS：全米社会科教育学会）でも分科会で実施していた「デジタルシティズンシップと情報モラル」について日本の状況もわかり、いろいろ勉強になった。

８月４日（金）

ICT 教育展２日目の午前中は、東京学芸大学の高橋純氏から「児童生徒一人ひとりの学びの質を高める一人１台端末の活用」の話があった。単線系から複線系への授業についての話があった。「校務系と学習系を一体化したい」、とのことであった。

また、ファイルを共有するのではなくてデータを共有する重要性を学んだ。

午後からは、文科省の教育 DX 推進室長藤原志保氏から、「教室 DX と教育データ利活用の現状と今後」についての講話があった。

最も重要なことは、今、教育 DX のチャンスがあるということである。

教育 DX に向かって３段階のステップがある。

（第１段階：デジタイゼーション、第２段階：デジタライゼーション、第３段階：デジタルトランスフォーメーション）

わが国の教育現場は、第１段階から第２段階へ移行しつつある時期である。子どもたちの学びや教員の働き方を変えるチャンスととらえる必要があることを学んだ。

令和３年３月に教育データの利活用についての有識者会議が開催されている。

＜文科省の取り組み＞

①共通ルールの整備
　学習指導要領コードで、自動的に連携、子どもに応じてどの教材を与えるか？
　改めて筆者の関心である「デジタル教科書社会」をどのように活用するか？考えさせられた。
②基盤的ルールの活用
③国内外における CBT 化
　紙テストでは難しかった思考力のテストが可能である。教育データの分析からアクションまでを行う。

(4) 学園・大学・短大・他学科等への波及効果

実際に、令和５年度の子ども教育学科３年生 65 名の「教育と方法」、２年生酒井ゼミ５名と「選択社会」の受講生７名の講義で、ICT 教育を導入

し、実践することで、子ども教育学科の学生たちがＩＣＴに、関心を持ち意欲的に主体的に学ぶことができた。また、親子のためのオープンキャンパスを 2023 年 12 月 16 日（土）に開催した。まず、筆者（酒井）が、プログラミングの基礎（「順次進行」、「条件分岐」、「繰り返し」）について話をした後、SCRATCH を学習した「選択社会」の受講生と、３年生の酒井ゼミのＩＣＴ教育で卒論に取り組んでいる徳永さんが講師となり、プログラミング学習を親子や鵬翔高校の学生たちに対して実施した。

（写真 1）ICT プログラミング（都城地理クイズづくり：SCRATCH）に親子で楽しそうにチャレンジする優衣さん（小４）とゼミ生講師の徳永さん（子ども教育学科３年）

（写真 2）鵬翔高校の代表学生（安富さんと村屋さん）が当日のプログラミング SCRATCH による講習成果としての社会科地理クイズづくりを発表

（写真 3）　ICT スクラッチプログラミングに真剣に取り組む又木さん親子と高校生と南九州大ゼミ生

(5) 考察

今年度３年目は、できるだけ ICT プログラミング学習の成果をアウトプットするように努め、ICT に慣れている学生が主体的にプレゼンしたりレクチャーしたりする親子のためのプログラミング教室の開催にチャレンジしてみた。

今後、南九州大学のカリキュラムや講義に、この ICT 教育やプログラミングの学習を組み込んでいく必要性が、今回の授業レベルでの実践で明らかになった。さらに、授業構成などを検討していく必要がある。また、今回の実践研究の結果を、いずれ詳しくまとめておこうと考えている。

(6) 今後の課題

ＩＣＴ教育におけるデジタル教科書の活用と、プログラミング学習の在り方について考えることは、本大学においても喫緊の課題である。

子ども教育学科の 3･4 年生対象の前期（4 月～8 月実施）「教育と社会」の授業で SCRATCH のプログラミング学習を導入したり、12 月に、親子のためのオープンキャンパスで、親子や高校生にプログラミング体験を実施したりするなど、実際の授業レベルで実施することが大変効果的であり、好評であった。今後は、徐々に、ICT 教育やプログラミング学習の意義について、地域の人たちにも認知度を挙げていくことが課題である。

今後、今回の ICT 教育、プログラミング学習の実践研究の成果をもとに、さらに、大学のカリキュラムの中の講義に取り入れて、将来、教員を目指す学生たちに ICT リテラシーや情報活用力を育てていきたい。

註

1) Scratch（スクラッチ）は、Scratch 財団がマサチューセッツ工科大学（MIT）と共同開発する、8 ～ 16 歳のユーザーをメインターゲットにする教育プログラムのことである。

３）参考文献

・新井紀子 (2020)『ほんとうにいいの？デジタル教科書』岩波ブックレット，　p.70.　岩波書店
・デジタル教科書「紙と併用」朝日新聞 5.28,2021

近年、学校現場で、導入が注目されている GIGA 構想によるデジタル教科書やプログラミングについて３年間､試行錯誤しながら考えてきた。

2022 年度から始めた研究も 2024 年 3 月で、3

年目が終了し、充実してきた。

今後、さらに、この分野は、学校現場でも、重要になってくるので、講義や、学生主体の地域での親子教室を工夫しながら実践研究を進めていきたいと考える。今回、このテーマを考えることができた学長裁量費の機会に感謝したい。

実践２.「親子で楽しく学ぶ！地理歴史」講座（2023年12月16日）：こどものためのオープン・キャンパス報告

今年度、久しぶりに、「親子で楽しく学ぶ！地理歴史」講座（2023 年 12 月 16 日）：こどものためのオープン・キャンパスを開講した。（平成28･29 年度にも「楽しく学ぶ！地理歴史」を実施。この時は小学生親子３組、退職された高校の先生、現役の高校の先生、選管の方、おばあちゃんなどがご参加されました。）

今回は、親子という初めての企画だったが、三股西小学校の親子や鵬翔高校の学生さんが参加し、楽しく地理歴史に親しみ学ぶことができました。優衣さん（小４）は、丁度、小学校６年の歴史で習う小村寿太郎（宮崎県日南出身）について、小４の総合学習で取り組んでおり、丁度筆者が分担執筆した「小村寿太郎と条約改正」の社会科教育法で使う教科書と、英語教材「条約改正（Treaty Revision）」により、「関税とは何か？」の学びを深めました。安富夢さんと守屋真陽南さん（鵬翔高校）は、防災教育について、ESD 景観レポートを発展させたプレゼンをしてくれてみんなが学びを深めました。

・小学４年生又木優衣さん

「今日まなんだ事や食文化クイズなどいろいろな事をして楽しかったです。今日まなんだことを、後の学習でいかしていきたいです。次は、ほかの歴史人物などの学習をしていきたいと思いました。これからも、社会の勉強をして、歴史や食文化、その県で有名な所や食べ物などをおぼえたいです。」

・又木優衣さんのパパ

「学生の皆さんが、それぞれ設定した課題をどのように子どもに教えるか、レポートを通して見ることが出来て良かったです。娘にとっても今後自由研究をする際にどのように文章を構成すればよいか参考になったと思います。講座はただ聴くだけでなく、参加型だったので体験を通して興味を持ち印象に残ったと思います。今後も、是非参加型の講座の企画をして頂けたらと思います。」

・安富夢さん（鵬翔高校）、（現在、南九州大学子ども教育学科１年生）

「今回、参加させていた頂いてとても楽しい講座だなという印象を受けました。

実際に景観レポートを使って発表し、先輩方からも評価を頂けて良かったです。

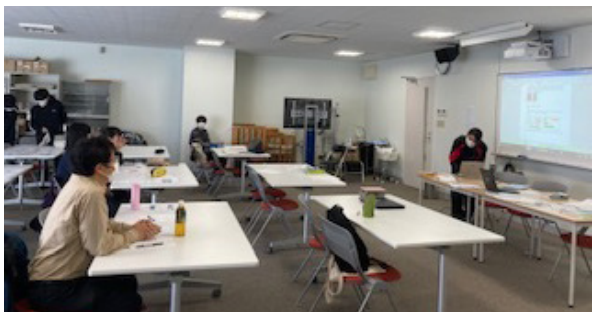
また、全国地理かるたや食文化クイズなど、楽しめるアクティビティも豊富で楽しかったです。」

・村屋真陽南さん（鵬翔高校）

「今日は ESD、SDG ｓをテーマとした景観レポート発表や食文化クイズ、小村寿太郎について、かるた、など、さまざまな地域に根付いた体験ができて新鮮でした。SDGs など、身近なようで身近ではないものについて深く考え、地域への理解を高めることができました。大学生の方とも話すことができ、南九大の先生の暖かさを知れました。また機会がありましたら顔を出しに来ます。」

（写真 4）全国都道府県カルタに夢中！みんな真剣！

全国都道府県カルタに挑戦！全国の都道府県の地域的特色を楽しいカルタ（全国地理教育学会編）を通して、楽しみながら学ぶことができました。参加した鵬翔高校の守屋さんは元カルタ部で、今回の講座で見事優勝！小学生の優衣さん（小４）もよく頑張りました！



（写真 5）南九大「選択社会」受講生（2 年生）の環境エネルギー（電気自動車と SDG s ）の景観レポートの授業発表（秀逸でした！）

（写真 6）鵬翔高校の学生さんのペア（安富さんと守屋さん）の ESD 景観レポートの授業発表の様子
（防災教育）「凄い！」と評判でした。大学生からも賞賛。

（写真 7）小学生優衣さんの小４課題学習で、小村寿太郎について学んだことの発表、頑張りました！

（写真 8）小村寿太郎について英語で学ぶ

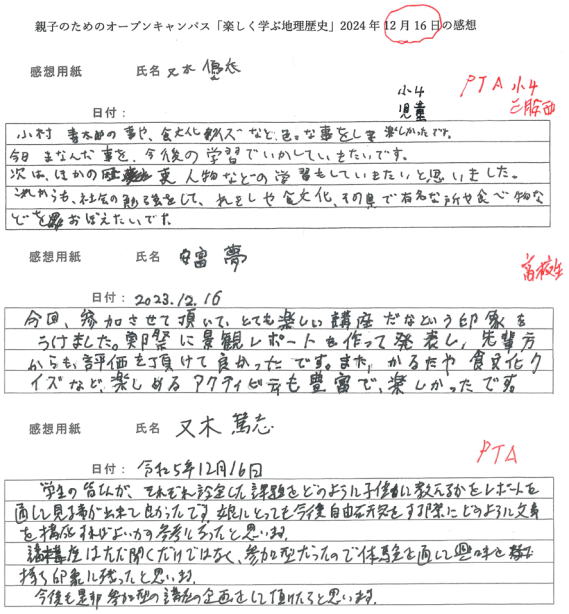
小学生優衣さんが、その内容を、中学生レベル（英語）で体験。お父さんと一緒に共同で、中学英語で歴史を学ぶ授業を体験。この授業をきっかけに、今後、さらに、歴史の人物学習を頑張りたいそうです。

（写真 9）優衣さん（小4）のお父さんによる SDG s景観レポート（南九州大学3年生 60 名分）のベスト1の発表

木材を題材に循環型社会の重要性を構想した４年の森木君の景観地理レポートが、とても良いと評価された。

今回、初めての、「親子のためのオープンキャンパス、「楽しく学ぶ地理歴史」は、少数ではあったが、意欲的主体的な受講生の参加により、最近の教育課題「個別最適化」に対応し、受講生や高校生、南九州大ゼミ生のななめプロジェクト交流で、深い学びとなり感想のように好評であった。

また、この時、ESD のプレゼンをしてくれた高校生安富夢さん（当時鵬翔高校３年生）は、今年度４月より、子ども教育学科の新入生として南九州大学で学んでいる。さらなる発展を期待したい。



親子のためのオープンキャンパス「楽しく学ぶ地理歴史」2024 年 12 月 16 日の感想

感想用紙　氏名 又木 優衣　小4 児童　PTA 小4 三脇西

日付：

小村寿太郎の事や、食文化、歴史など、色々な事をして楽しかったです。
今日、まなんだ事を、今後の学習でいかしていきたいです。
次は、ほかの歴史人物などの学習もしていきたいと思いました。
これからも、社会の勉強をして、礼をしや食文化、その国で有名な所や食べ物などを覚えたいです。

感想用紙　氏名 安富 夢　高校生

日付：2023.12.16

今回、参加させて頂いて、とても楽しい講座だなという印象をうけました。卒業に景観レポートを作って発表し、先輩方からも、評価をして頂けて良かったです。また、かるたや食文化クイズなど、楽しめるアクティビティも豊富で、楽しかったです。

感想用紙　氏名 又木 篤志　PTA

日付：令和5年12月16日

学生の皆さんが、テキストを検証し課題をどのような子供に教えるかをレポートを通して見る事が出来て良かったです。親にとっても今後自由研究を手伝うにどのような文書を掲示すればよいかの参考になったと思います。
講座は、ただ聞くだけではなく、参加型だったので体験を通して思いやり等を持つ印象に残ったと思います。
今後も是非参加型の講座の企画をして頂けると思います。

（資料 1: 親子のためのオープンキャンパスの感想）

実践３．小村寿太郎記念館を活用した歴史授業から関税を考える授業づくり（社会科教育法）

2022 年に分担執筆したテキストを使用（社会科教育法）して授業を進めてみた。

ここでは、身近な地域素材を活用した歴史授業づくりの方法や、歴史を通して「関税」の概念を獲得し、ウルグアイラウンドや近年の米中貿易問題のような現代社会を読み解く重要性について学んだ。

受講生の感想は次のとおりである。

〈受講生の感想〉

・Ｎさん

テキストを読んで小村寿太郎について詳しく知ることができた。

小村寿太郎が日南の出身であることに驚いた。社会の授業の流れが詳しく記載されておりこのような感じで授業づくりをするのかとすごく学ばされた。授業づくりで大切なことがいくつも記載されていたので、もっと読み込んで大切なことや授業の流れをつかんでいこうと思った。

・Ｔ君

自分も教員になった時には参考にしたい内容だった。この文章を読みながら何を子どもに学ばせたいのか簡潔にまとめられていたため、授業の流れが頭の中に入ってきてすごく分かりやすかった。来月からは実習も控えているため、自分の中で子どもに何を学ばせたいのか、を明確にするための方法を学んでいきたいと感じた。

・Ａさん

「関税自主権」という言葉から、経済用語としての「関税」という言葉の意味をしっかりと教えることが大切であるということが分かった。

分担執筆した社会科授業づくりの実践のテキストを活用することで、学生たちは、予習、復習をしっかりするようになった。また、社会科で必要な言語力（読解力や書く力等）を培い、授業のテーマである身近な地域教材開発の意義やフィールドワークの重要性について学ぶことができた。

（写真 10）教科教育法（社会）で活用している教科書（分担執筆）
伊藤裕康編『社会科教育のリバイバルへの途～社会への扉を拓く「地域」教材開発』学事図書出版社

筆者の担当は、地域教材を活用した単元「小村寿太郎と条約改正」の授業づくり (6 年歴史)、「地域」教材を活用した小中一貫性のある社会科の学習」（5 年地理、中学地理）

おわりに

2023 年度の実践１. ICT とデジタル教科書実践研究、２. 親子のためのオープンキャンパス報告、３. 小村寿太洋記念館を活用した歴史授業から関税を考える授業実践、を報告した。１の成果は、数学者で『ほんとうにいいの？デジタル教科書』の著者の新井紀子氏のゼミ生の教科書レポートを読んで頂いたことである。今後さらに、教科書（デジタル教科書と紙教科書）について考えたい。２の成果は、親子のためのオープンキャンパスで、鵬翔高校の生徒が行事などで多忙の中、2 名代表生徒を土肥校長先生が派遣して下さり、高校生が参加し、ESD（防災教育）について親子や大学生に秀逸なプレゼンしてくれたことである。親子にとっても、大学生にとってもよい刺激となった。３の成果は、資料館や博物館の活用、分担執筆した教科書（分担執筆：身近な地域教材からの授業づくり）の有効性が検証できたことである。今後も、さらに、これらの実践研究の成果をもとに、より良い実践を目指したい。